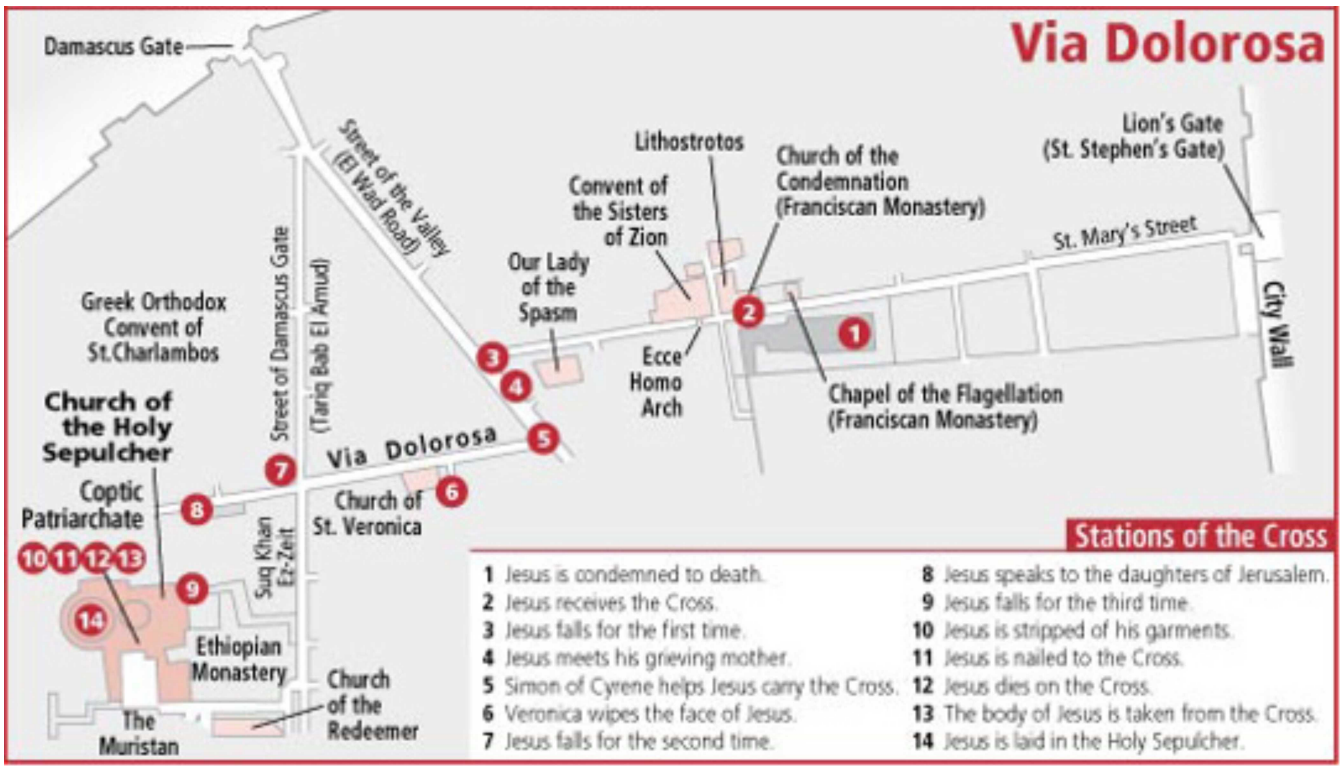
「神の国を受けつぐ者」

挽地茂男

（マルコ１０：１－３１）

2018.9.2 日本基督教団千歳丘教会

キリスト教の三大聖地（巡礼地）と呼ばれているのは、エルサレムとローマとスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラであります。キリスト教は、成立の当初から殉教者を出しましたが、その殉教した人たちの墓所に詣でて敬意を表する信者がいました。人々はこの墓所を martyrium マルティリウム〔martyr マルティルは殉教者〕と呼び、これが後に殉教者の記念礼拝堂として発達します。マルティリウムは礼拝の場である教会と並び、キリスト教コミュニティの重要な中心となってゆきました。エルサレムはもちろん、イエス・キリストの終焉の場所であり、キリストの墓があったとされる場所に現在は聖墳墓教会があり、同時にそこが、刑場となったゴルゴダの丘であったと言われています。〔昨年の「野のゆり」イースター号では、十時先生が、ゴルゴタと墓が別の場所である、という説をご紹介くださっています。〕主イエスは、十字架を背負って総督ピラトの官邸（プラエトリウム）から刑場のあるゴルゴダの丘（現在の聖墳墓教会）までの道のりを歩



いたとされています。この十字架に向かって主イエスが歩いたと言われる道を「ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）」と呼び、多くの巡礼者が、その道を辿ります。

ローマは、言わずと知れたバチカン市国のあるところ、ローマ・カトリックで初代教皇とされるペトロの墓所があるとされているところです。元来マルティリウムであるそのペトロの墓の上に立つのが、サン・ピエトロ大聖堂（聖ペトロ大聖堂）であります。ローマ教皇庁が統治するカトリックの総本山なのです。

サンティアゴ・デ・コンポステーラ、この町には、サンティアゴつまり聖ヤコブの墓所があります。ヤコブは主イエスの１２弟子の一人で、ゼベダイの子ヨハネの兄弟でヒスパニア（スペイン）で宣教し、エルサレムに帰ったところを捕らえられ、ヘロデ･アグリッパ１世によって斬首されます。殉教したヤコブの遺骸はその後、この町まで運ばれて埋葬されたとされています。この町に向かう巡礼路は、フランスから始まる主要な4つの道からスペインに向かい、ピレネー山脈を越える全長約5000km、徒歩で相当早くて１ヶ月、数か月～1年かける場合もありますが、現在も年間約10万人の巡礼者が訪れます。

Santiago de Compostela Cathedoral

巡礼（pilgrimage）とは、日常的な生活空間を一時的に離れて、宗教の聖地や聖域に参詣し、聖なるものにより接近しようとする宗教的行動のこと、と一般的に定義されます。洋の東西を問わずこのような巡礼は今もって盛んに行われています。キリスト教の世界では、こうした巡礼の旅で病に倒れた人、宿を求める人を宿泊させた巡礼教会があります。その小さな巡礼教会を「hospice　ホスピス」と呼びました〔現代の終末医療施設のホスピ

サンティアゴへの巡礼路

スの淵源もここにあります。人生の旅の最後をお世話するのです〕。このホスピスでのもてなしから「hospitality　ホスピタリティ（歓待）」という語がうまれ、病人の看護などの仕事をする部門が教会の中に作られるようになって今日の英語でいう「hospital（病院）」が派生しました。

さて、わたしたちは今、ガリラヤから南下して、エルサレムむかう主イエスの受難の道を、巡礼者のように辿っていますが、エルサレムが少しずつ近づいてきました。今日は、思い切って足を速めて、３つのあるいは４つ〔４つとみた方が理解しやすいと思いますので、以下は４つで説明します。この４つ〕のエピソードを一気に進んでしまいます。〔細かい解説が必要な箇所は、時を改めてお話しします。〕今４つのエピソードを一気に読む方がよいと申し上げました。それは、主イエスの説く神の国と関連して、４種類の人々が主イエスに近づいている、あるいは、主イエスの近くにいるからです。４つのエピソードを一気に読むことによって、登場する人々のコントラストが鮮明になります。

さて、最初のエピソードには、ファリサイ派の人々が登場します。このエピソードを読まれたとき、これは離婚の話じゃないか、受難の道行きとは関係ない、と思われたかもしれません。倫理的な規定がこんな所に盛り込まれているので、物語の流れが切れている、と思われたかもしれません。しかしこのエピソードは、離婚の是非を問う物語ではないのです。主イエスに近づいてきたのはファリサイ派の人々です。しかもその動機が「イエスを試そうとした」（v.2）と言われています。このエピソードは「離婚」を論争ネタにしてファリサイ人が主イエスにふっかけた、一種の論争物語なのです。皆さんは憶えておられるでしょうか。２章１節－３章６節の「第一論争物語集」に収められた５つの論争の最後に、どう記されていたでしょうか。３章６節。

マル 3:6 ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々

と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

論争に破れたファリサイ派の人々は、既にこの時点で、ヘロデ派の人々と主イエスの死を画策しているのです。この後も論争が起こっています。3章20－30節の「ベルゼブル論争」。主イエスが悪霊の頭ベルゼブルに取憑かれていて、その力よって悪霊を追い出している、と律法学者たち(つまりファリサイ派の人々)が、主イエスを冒涜します。6章に入ると、

洗礼者ヨハネが、ヘロデ･アンティパスによって斬首されます(6:14-29)。ヨハネがヘロデの離婚問題を取り上げたからです。古代の為政者の結婚が、ほとんどが政略結婚であったために、彼らの離婚を問題にすることは政治的危険性を孕むことが容易にあったのです。主イエスがガリラヤから南下して今現在おられる場所が「ヨルダン川の向こう側」(v.1)と書かれています。ヨルダン川の向こう側で、ファリサイ人が容易に活動できる――異邦人の土地ではなく――ユダヤ人の土地と言えば、「ペレア」で間違いありません。「ペレア」は、ヘロデ・アンティパスの領地です。

ファリサイ派の人々は、今、主イエスに離婚論争を仕掛け、彼を、洗礼者ヨハネの運命と同じ運命に導こうとしているのです。彼らは、第1論争物語集で確認したイエス殺害の意志を、継承しています。

その後も、ファリサイ派の人たちは、主イエスに論争を仕掛けてきます。7章は、不浄論争(7:1-23)です。弟子たちが洗わない汚れた手で食事をしていると、彼らは主イエスに向かって、「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか」(7:5)と詰問します。一方、主イエスは彼らの偽善を見抜いて、「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。『この民は口先ではわ

たしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。7:7 人間の戒めを教えとしておしえ、／むなしくわたしをあがめている。』7:8 あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている」(7:6-9)と切り返します。そして「7:15 外から人の体に入るもの〔=食物〕で人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである」(7:15)、さらに続けて「人から出て来るものこそ、人を汚す。7:21 中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、7:22 姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、7:23これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである」(7:20-23)と言い放ちます。この言葉は、ファリサイ人たちの隠れた殺意を暗に指摘しています。８章では、ファリサイ派の人たちは、「天からのしるし」を要求して、主イエスの言動と権威を支持するものを示すように迫ります(8:11-13)。そして１０章。今日の論争物語にたどり着きます。

ファリサイ人が仕掛けた離婚論争は、イエスへの殺意を孕んでいます。しかし、エルサレムに向っていく主イエスの後をゆく弟子たちの不安と恐怖心を尻目に、主イエスはエルサレムに向う足取りを緩めようとはしません。主イエスにとってエルサレムがどんな場所になるか。主イエスが語る３度の受難予告を聞かずとも予想が可能です。そしてエルサレムに到着すると主イエスの受難は現実味を帯びてきます。エルサレム入城のあと、ユダヤ教の祭のための祭儀用の動物を商う商人や、皇帝の彫像や神々の像が刻まれた異国の貨幣を、神殿に献げるために彫像や偶像のついていない貨幣に交換する両替商たちと神殿祭司たちが作り上げた神殿の経済機構を糾弾する主イエスによる「宮清め」、１１－１２章におさめられた６つの論争から成る第２論争物語集(11:27-12:37)を通過して、１３章に世界の終末、世界の終わりの預言を配置して、もう一つの終わり、つまり主イエスの生涯の終わりと二重に重ね合

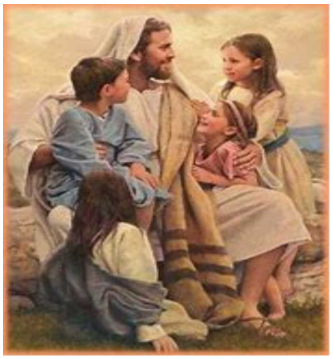
わせて、主イエスの終わりに終末論的な重みを加えると、１４章からは、一気に、主イエスの生涯の終末つまり受難物語が展開します。ファリサイ派に加えサドカイ派をも含めた宗教勢力とヘロデ派とローマ帝国を中心とする政治勢力の、宗教と政治の合作として主イエスの死が画策されるのです。今日のエピソードにも登場したファリサイ派の人々は、主イエスの説く神の国に対して、興味をもつどころか、それを破壊し無きものにすることにのみ興味を持つ人たちなのです。

さて、次に主イエスに近づいてきたのは子どもたち（παιδία）でした。小さな子どもたちが、主イエスに触れていただくために連れてこられたのです〔おそらく親が連れてきたのでしょう〕。弟子たちはこれを見て叱りました。弟子たちの行動が不当であると考えてはなりません。古代では、これが常識なのです。古代において、子どもはまだひとりの人格と認められていませんでした。いわばまだ非・人格（non-person）だったのです。ですから、子どもは女たち（母親たち）とともにおらねばならず、教師やその門人たちの間をうろついてはならなかったのです。

主イエスは弟子たちの態度に憤り、子どもたちを招きます。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」（v.14）。そしてこう続けます。「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（v.15）。子どもたちは神の国を受け入れたのでしょうか。どこかで信仰告白をしたのでしょうか。主イエスは、子どもたちに神の国について教えていませんし、ましてや論じ合ってなどいないのです。それとも子どもたちが、将来成長し、理解を持って神の国を受け容れるときが来ると仰っているのでしょうか。そうではありません。子どもたちは、今もう既に、神の国を受け入れている、神の国は子どもたちのものだ、と主

イエスは仰っているのです。この主イエスの態度から、神の国について大切なことを知ることが出来ます。まず神の国は、教えて分かるものでもなく、論理によって証明されるものでもないということです。神の国は、教えでもなく、論理でもなのです。それは経験なのです。理論は経験に先行しないのです。理論はやはり後付けなのです。ニーチェは思想と感覚を比較してこう語りました。普通わたしたちは、思想と感覚を比較した場合、思想の方がうんと上等だと思っています。しかしニーチェはこう言います。「思想は感覚の影である。つねに感覚よりも暗く、空虚で、単純だ。」思想と感覚を比較すれば、どちらが本体でどちらが影か。当然感覚が本体だ。よって思想は感覚を後付けする言葉にすぎない。だから当然、感覚よりも暗くて、空虚で単純なのだ、とニーチェは言うのです。思想にはどうしても、後付的な要素があるのです。神の国は思想ではなく経験です。子どもたちはもう主イエスの腕の中で、神の国を経験しているのです。

宗教の経験は言語化不能、言語で表せないものをもちます。臨済宗の栄西は『興禅護国論』の中で、宗教の真理についてこう述べています。宗教の真理は「教外別伝」、それは教えても教えても、教えの外から伝わるもの、「不立文字」それは、文字には立たないものなのだ、と言います。しかし言葉の生き物である人間は、言語化不能である宗教経験を何とか言語化しようと、言語で言い表そうとします。結果として、宗教の言葉には比喩や、象徴や、イメージ表現が多くなるのです。この子どもたちのエピソードには、神の国を雄弁に物語るイメージが使われています。主イエスの腕に抱かれて、手を置かれて、祝福されている子どもの図です。神の国は理屈でも理論でもないのです。



さて次に主イエスに近づいてきたのは、一人のお金持ち、資産家でした。マナーの「善い」、礼儀正しい人物です。彼は「善い先生」である主イエスに尋ねます。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」

(v.17b)。この永遠の生命を求める資産家は、「善い」ものにこだわりがあるようです。彼は「善い」しつけを受けた人のようです。十戒の教えについても「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言えるくらいなのですから。

善良な「善い」市民として、「善い」道徳的生活を送ってきた人なのでしょう。もちろん経済的に恵まれた「善い」生活を送ってきた人のようです。しかし彼の中には、何か確信がかけていたのです。「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」という質問は、彼の不安を表しています。その「永遠が」時間的永遠をさして彼が不死を求めているのか、あるいは、質的な永遠をさして充実した生活・生命――平たく言えば生きがいのようなもの――を求めていたのかは、にわかには分かりませんが、彼はそれを得る必要があり、それを得るためには何か行動することが必要であると考えたのは確かです。まずは「善い先生」を探しました。おそらく評判を聞いて、やってきたのでしょう。礼儀を尽くして、しかも熱意を込めて主イエスに尋ねます。その真剣さは主イエス自身が「慈しみ」を覚えたほどでした。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」主イエスの返答は、この資産家の意表を突いていました。同時に、彼の問題の中心点を突いているのです。この資産家の目は、自分の周りにある「善い」ものに向いていました。しかし神には目が向いていないのです。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」(v.18)。さらに続けて主イエスが十戒の後半の人間に関係する6つの戒めを列挙し、「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ」(v.19)と言うと――先ほど見たように――資産家は「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と返します。

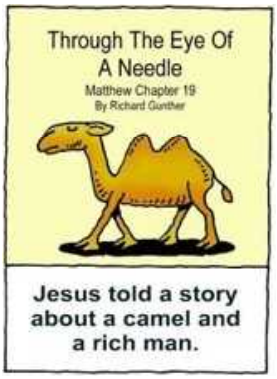
ついに、主イエスが彼

の問題の中心点を突く時がきます。主イエスは彼をじっと見つめ、慈しみを込めて言います。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」(v.21)。資産を売却して貧しい人々に施しをせよ、と言われるのです。「そうすれば、天に富を積むことになる。」天に対する視野が開けてくると言うのです。

般若心経の１節に有名な「色即是空、空即是色」という言葉があります。仏教学をやっている友人に、この言葉がずいぶんと悲観的な印象がすると言ったときに、その友人が仏教の空の思想には積極的な側面があるのだ、と教えてくれたことがあります。「色即是空。」色は色事という狭い範囲のことではなくて、色のついているもの全部、物質的世界を表します。わたしたちはこの色の世界の色や形に惑わされていくのです。空はインドのサンスクリット語の「ゼロ」を意味する言葉で、本質がない、恒常的な実体がないという意味ですから、仏教では、わたしたちを取り巻く物質的な色の世界を「空」、本質がない、と見切るのです。そのとき、「空」が「そら」と読むように、物質的執着から解き放たれた精神は、広がる大空のような精神の無限の可能性を獲得する、のだそうです。〔聖書の創造論では、この世界は原則的に肯定的にとらえられています。〕仏教の説くことがそのまま当てはまるとは思いませんが、このエピソードの資産家は、「善い」ものを大切にする余り、真に「善い」者(方)が見えなくなっているのです。彼は、「善い」ものコレクターの現在から解放される必要があるのです。主イエスの言葉に資産家は「気を落とし、悲しみながら立ち去った」のでした。

このエピソードが、次の主イエスと弟子たちのやりとりの背景になります。弟子たちは、ファリサイ派の人々が主イエスに議論をふっかけたときも、主イエスが子どもを抱き上げて祝福しているときも、そして金持ちが主イエスの言葉を聞いて、「気を落とし、悲しみながら立ち

去っ」て行った姿も見ていたのでした(v.21)。その金持ちの背中を見送ると、主イエスは「弟子たちを見回して」――この「見回す」という単語はマルコに特徴的な単語で、マルコがこの動詞を、主イエスを主語にして使うときは、主イエスが「信仰の有無を確かめる」ために「見回す」という文脈になります(11:11)――こう言われます。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」(v.23)。そして続けて「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。 10:25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(v.24-25)。



弟子たちはこの言葉に、「それでは、だれが救われるのだろうか」(v.26 τίς δύναται σωθῆναι)と驚きを表わします。主イエスは、弟子たちを見つめて厳かに言われます(ἐμβλέψας αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς λέγει)。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」(v.27 παρὰ ἀνθρώποις ἀδύνατον, ἀλλ' οὐ παρὰ θεῷ· πάντα γὰρ δυνατὰ παρὰ τῷ θεῷ.)。 するとここぞとばかりに、主イエスの言葉が切れるのを待っていた弟子がいました。ペトロです。「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」(v.28)。「待ってました」とばかりの言葉です。だめな金持ちに代わって、今度はわたしの番だ、と言わんばかりです。しかし主イエスはペトロの良さも弱さもご存知でした。こう言われます。「はっきり言っておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、10:30 今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける」(v.29-30)。この翻訳はほぼ誤訳です。いつも翻訳を批判するので、皆さんが、翻訳聖書に信頼を失うのではないかと少し心配ですが、９９％は大丈夫なのです。あとの１％に翻訳が困難な問題の箇所があるのです。日本の翻訳者は、もちろんギリシア語はしっかりと出来ますが、欧米の翻訳を参考にするので、難しい箇

所では。英語やドイツ語の翻訳にかなりのところで準拠してしまうのです。この箇所のほぼ全ての翻訳が、弟子たちの主イエスへの献身や、弟子であることの結果として与えられる祝福を理想化した誤訳です。この箇所は直訳すればこうなります。「はっきり言っておく（アーメン）。今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世で永遠の命を受けるのでなければ、わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれもいない」(v.29-30)。献身にも打算が入り込む、と言っているのです。しかし、たとえ弟子たちの献身がそのようなものであったとしても、主イエスはそれを尊いものと考えておられるのです。そこからすべてが始まるのですから。

　ペトロは非常に人間的です。愛すべき人です。主イエスが第１回目の受難予告をされたときもそうでした。主イエスが「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」(8:31)と言われると、ペトロは主イエスをわきに連れ出して、そんなことがあろうか、と主を叱りつけたのでした。主イエスはペトロに向かってこう言われました。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」(v.33)。主イエスはペトロの良さも弱さもご存知でした。ペトロの言葉は、彼の素朴な競争心の現れでした。それともエルサレムに行って、そこで一旗揚げることになるイエスという勝ち馬に乗っているつもりだったのでしょうか。ペトロだけではありませんでした。ゼベダイの子ヤコブとヨハネもそうでした。

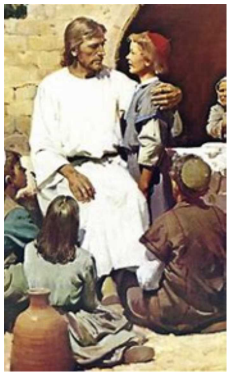
１０章３７節。

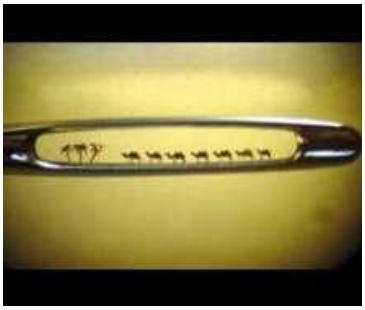
マル10:37 二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」

われらこそは、金持ちとは違ってすべてを捨てて従ってまいりました。ですから救いに値するはずです、とペトロは言いたいのでしょうか。主イエスの言葉は、自分たちこそ、先を走っていると思って

いる弟子たちをたしなめるのです。「はっきり言っておく（アーメン）。今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世で永遠の命を受けるのでなければ、わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれもいない。」こう訳さなければ、次の言葉が死んでしまいます。「しかし、先にいる多くの者（πρῶτοι）が後（ἔσχατοι）になり、後にいる多くの者（ἔσχατοι）が先（πρῶτοι）になる」（v.31）。

さて、イエスに近づいてきた人たちの中で、あるいは近くにいた人たちの中で、一番先頭を走っているのは誰でしょうか。「弟子たち」と言いたいところです。ペトロ（弟子たち）は自分たちが、多くの人々より先を行っている、と思っています。しかしそんな自負や自意識は無意味なのです。主イエスは弟子たちの献身を高く評価し、彼らを愛しておられました。しかし、主イエスの腕に抱かれて祝福されている、信頼しきった幼子（παιδία）の姿こそ「神の国」の姿なのです。「あなたがたは先になど行っていないのです。」すでに９章の３５節で、主イエスはこう教えたではありませんか。「いちばん先（πρῶτος）になりたい者は、すべての人の後（ἔσχατος）になり、すべての人に仕える者（διάκονος）になりなさい。」神の国においては、立場と価値が逆転するのです（10:31）。神の国における偉大さは、通常の偉大さや栄誉に関する理解を覆すのです。人の上に立つこと、人を押しのけて自己目的を貫徹し、自己実現を図る願望は退けられるのです。一番先を行くものは、他者の姿が見えません。しかし一番後から行くものは多くの人々が視野にはいるのです。主イエスは、競争心、上昇志向の中に潜む無意識的な他者損傷、他者抹殺の精神を砕くのです（διάκονος＝給仕）。わたしたちが、自分の力で救われることなど不可能なのです。自分の献身を全うすることも不可能なのです。しかし主イエスは「人間にできることではないが、神には





できる。神は何でもできるからだ」(v.27)と仰います。その意味では、わたしたちは皆、針の穴を通った「らくだ」なのです。と同時に、

主イエスが腕に抱いて、慈しみと、祝福とを祈らせれる子どもなのです。しつこく比喩的に表現すれば、主イエスの腕に抱かれて、その腕のぬくもりに暖められるとき自分の罪深さが分かるのです。八木重吉の詩に「草にすわる」という詩があります。「わたしの　まちがいだった／わたしの　まちがいだった／こうして　草にすわれば　それがわかる。」人が創造主の懐で、最も心を開いたとき、自分の正直な姿が分かるのです。

　新しい一週間も、主イエスによって罪赦されたものとして、主を信頼して、わたしたちの人生の巡礼路を歩んでまいりましょう。

2018.9.2 日本基督教団千歳丘教会